

超若
えろを
沖を

絢爛の花鳥画

石崎 光瑤

生誕
140年
記念

The Elegant World of Flower and Bird Paintings



生誕一四〇年記念 石崎光瑠 ― 若冲を超える！絢爛の花鳥画 ―

石崎光瑠（一八八四―一九四七）は、明治後期から昭和前期にかけて京都を中心に活躍し、鮮やかな色彩で独自性に富んだ華麗な花鳥画を数多く残した日本画家です。

富山県に生まれた光瑠は、石川県金沢に滞在した江戸琳派の絵師・山本光一に師事、その後十九歳で京都に出て、日本画の大家である竹内栖鳳に入門しました。一九一六年から翌年にかけてインドを旅し、帰国後、その成果として熱帯風景の花鳥を主題とした《熱国妍春》、《燦雨》を描いて文展・帝展で二年連続の特選を受賞、注目を集めました。

光瑠は、早くから伊藤若冲に関心を持ち、一九二五年には若冲の代表作を発見、雑誌に紹介しました。また、京狩野をはじめ広く古画を学習し、制作にも活かしました。

本展は、生誕一四〇年の節目に、光瑠の故郷・南砺市立福光美術館（富山県）のコレクションを中心に、初期から晩年までの代表作を一挙公開し、光瑠の画業の全貌を紹介します。



関西では初!!

石崎光瑠の大規模回顧展

石崎光瑠は故郷の富山県など北陸地方以外では、これまでほとんど紹介されてきませんでした。

光瑠だけを掘り下げた大規模回顧展は、関西初となります。

絢爛豪華な花鳥画の大作が目白押し!!

初期から晩年の作品が集結

石崎光瑠の作品は色鮮やかで、

その華麗で装飾性豊かな花鳥画の大作に特徴があります。

官展出品作品を中心に、初期から晩年の代表作が勢揃いします。

若冲に学び、若冲を超える!?

奇想の絵師・伊藤若冲を評価・発見

早くから若冲を評価し、研究していた光瑠は、大正末期に若冲の代表作

《仙人掌群鶏図襖》（西福寺蔵、重要文化財）を発見し、世に紹介しました。

本展では、光瑠によるその模写作品《鶏之図》も出品します。

寺外初公開!!

高野山金剛峯寺奥殿襖絵《雪嶺》

晩年の光瑠が描いた大作で、

通常非公開の高野山金剛峯寺奥殿襖絵二十面を特別展示します。

そのうち八面の《雪嶺》は寺外初公開となります。

みどころ
1

みどころ
2

みどころ
3

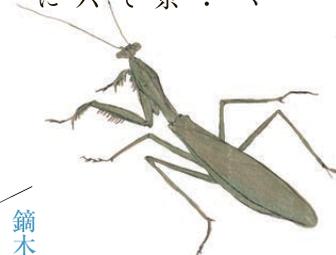
みどころ
4

第一章

画学修業と登山

富山に生まれた光瑠は、十二歳の時、金沢に滞在していた江戸琳派の絵師・山本光一に師事しました。十九歳で京都に出て、竹内栖鳳に入門。栖鳳塾で画技を磨いた光瑠は、一九二二年の第六回文展に初入選を果たし、第八回文展に出品した《笥》で褒状を受賞します。

この間、若き光瑠は近代日本登山史にも大きな足跡を残しました。父を亡くした一九〇六年夏に霊峰立山へ赴いて以来、光瑠は登山に没頭していきま。一九〇九年には民間「パーティー」としては初めての劔岳登頂にも成功しました。



鍋木清方がその「静寂な気品」に惹かれたと記した作品。宮内省買い上げとなった光瑠の出世作です。



《笥》

大正3年(1914)
南砺市立福光美術館蔵

石崎光瑠撮影「劔岳の絶頂」(部分)
原板：劔岳初登頂の記念写真
(石崎光瑠撮影) /
杉本誠収集作品 安曇野市蔵



《虫類写生》(部分) 明治29~36年(1896~1903) 京都市立芸術大学芸術資料館蔵

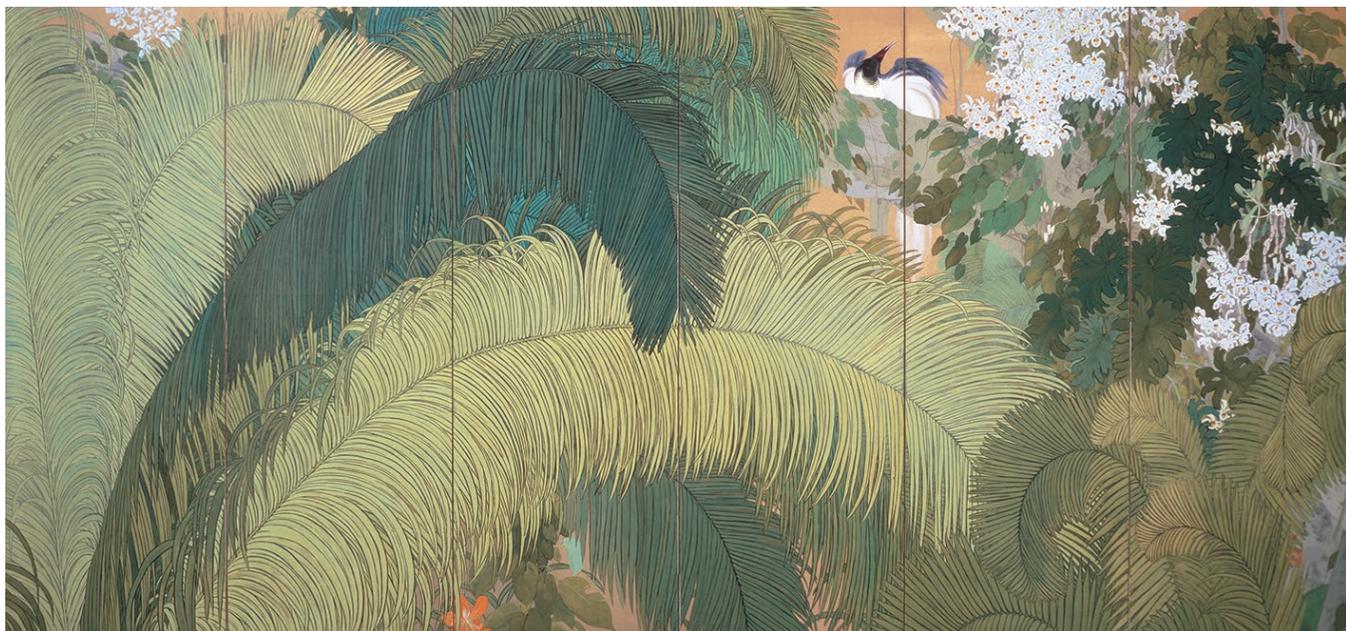
10代の少年だった光瑠による、博物学的な関心を示す丹念な写生が美しい作品です。



第二章

インドへの旅、新しい日本画へ

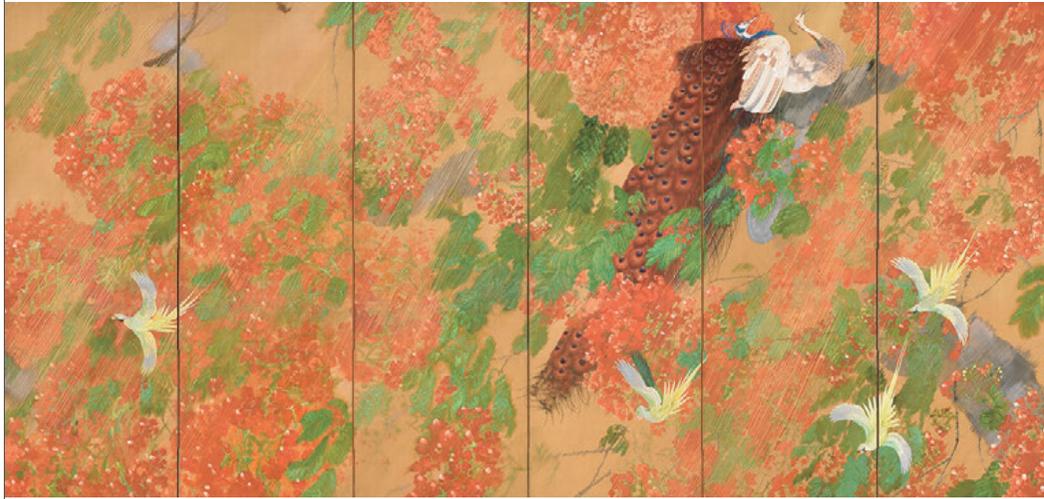
一九一六年から翌年にかけて、光瑠はインドを訪れました。ヒマラヤの一峰マハデユム峰にも登頂、古代建築や美術に触れるとともに、熱帯の動植物を精力的に写生します。折しも、友人の土田麦僊らが国画創作協会を創立した一九一八年、光瑠は国展には参加せず、インド旅行の成果として《熱国妍春》を第十二回文展に発表、特選を受けます。さらに翌年の第一回帝展には《燦雨》を発表し、連続して特選を受賞、近代京都画壇にその地位を確立します。それらの濃密で豊潤な新しい花鳥画は、若き上村松篁にも大きな影響を与えたことでも知られます。



ねっこくけんしゅん
《熱国妍春》
大正7年(1918)
京都国立近代美術館蔵

熱帯の自然美を描き出した
絢爛豪華な作品で、
光瑠のまさに代表作といえます。





《^{さんう}燦雨》大正8年(1919) 南砺市立福光美術館蔵

突然のスコールに驚いて飛び交うインコ、鳴く孔雀。
金泥を駆使した華やかな画面が特徴的な名作です。

《^{しろくじゃく}白孔雀》大正11年(1922) 大阪中之島美術館蔵

画面を覆いつくす緑の中で羽を広げる真っ白な孔雀。
鮮烈な色彩の対比が魅力的な逸品です。



第三章

深まるる絵画表現

こんこうぶしおくでん
金剛峯寺奥殿

〈虹雉の間〉

※襖絵は石崎光瑤《虹雉》
昭和9年(1934)



こんこうぶしおくでんふすまえ
金剛峯寺奥殿襖絵

《雪嶺》

昭和10年(1935)
金剛峯寺蔵



寺外初公開！

高野山金剛峯寺から襖絵制作の
依頼を受け、インドを再訪。

ダーズリン(金剛宝土)地方に取材した作品で、
描かれる雪嶺はヒマラヤ山脈をイメージしています。

にわりのす
《鶏之図(若冲の模写)》

大正15年(1926)
富山市郷土博物館蔵

「《家鶏二図》を前に座る石崎光瑤」
撮影：大正15年(1926年) 写真提供：南砺市立福光美術館



一九二二年から翌年にかけて、
光瑤はヨーロッパを巡遊します。
西洋絵画を研究し、特にフレスコ
画に関心を寄せました。また光
瑤は日本・東洋の古画も熱心に
研究しましたが、特に伊藤若冲
に関心を持ち、一九二五年には若
冲の代表作《仙人掌群鶏図襖》
(西福寺蔵、重要文化財)を発見、世に
紹介しています。

こうした絵画研究を通じて、
やがて光瑤の作風は絢爛華麗な
色彩美の世界から趣を変え、深
みのある洗練された画風へと変
化します。それは時に、モダンで
幾何学的な作風をも示しました。



若冲を愛し、若冲到学んだ光瑤。
光瑤が発見した若冲の《仙人掌群鶏図襖》の
一部を、光瑤が模写した作品です。
若冲の作品は紙地ですが、光瑤は絹地に描いています。

石崎光瑤 略年譜

- 明治17年 (1884)
富山県砺波郡福光町 (現南砺市) に生まれる。
- 明治29年 (1896)
金沢に滞在していた江戸琳派の絵師・山本光一に師事。
- 明治36年 (1903)
京都に出て、竹内栖鳳に入門。
- 大正5年 (1916)
インドを旅する。(～翌年)
- 大正7年 (1918)
第12回文展出品作《熱国妍春》で特選を受ける。
- 大正8年 (1919)
第1回帝展出品作《擦雨》で特選を受ける。
- 大正11年 (1922)
ヨーロッパを旅する。(～翌年)
- 大正14年 (1925)
伊藤若冲《仙人掌群鶏図襖》(西福寺蔵)を発見、雑誌に紹介。
- 昭和8年 (1933)
高野山金剛峯寺奥殿襖絵の揮毫依頼を受け、インド再訪。
- 昭和11年 (1936)
京都市立絵画専門学校 (現京都市立芸術大学)の教授に昇任。
- 昭和22年 (1947)
脳溢血のため死去。享年62。



《霜月》
昭和13年(1938) 東京藝術大学蔵

それまでの華やかな作品から一転。余白の美、省略の美、そして均整の美を追求した晩年の佳品です。



《聚芳》昭和19年(1944) 南砺市立福光美術館蔵

晩年の光瑤は牡丹の写生に熱中しました。徹底した写実、繊細な線描に基づく静謐な美しさは光瑤の到達点といえるでしょう。

第四章

静謐なる境地へ

一九三〇年代後半になると、大画面にたつぷりとした余白をとり、その中に繊細な線描を駆使した花などを描いた作品が多くなります。晩年の大作《聚芳》に代表されるような、静謐な雰囲気醸し出す独特な世界観が誕生します。これは、光瑤の徹底した写実、そして早くから追求してきた装飾性との調和によって確立された独自の境地といえるでしょう。師・竹内栖鳳が没して五年後、戦後でもない時期に光瑤も六十二歳で他界しました。



《襲》
昭和17年(1942) 個人蔵

第5回新文展への出品作。襲いかかる鷹から逃げまどう鷺などが描かれています。戦争の影が色濃い時期の作品です。

石崎光瑠物語

歴代日本画家の紹介漫画でもおなじみ、
日本画家・河野沙也子さんが、
本展に石崎光瑠の紹介漫画を
描き下ろしてくれました。

「河野さんコメント」

緻密に描かれた花鳥、眩しいほどに絢爛豪華な作品たちに囲まれた展示会場を想像し、
今からワクワクしています。石崎光瑠が生涯をかけて追求めた美しい世界に、私も早く没入したいです。

いしざき こうよう
石崎光瑠

1884/04/11
-1947/03/25



本名 猪四郎
出身地 富山県砺波郡福光町
(現南砺市)
実家 豪商
(父は実業家で文人)
家族構成 五男
師匠 山本光一、竹内栖鳳
好きな食べ物 干し柿

22歳の頃から
本格的な登山を始めた光瑠。
草花や山容を写生したり、
写真を撮ったりしたという。

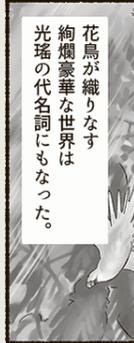


《燦雨》(部分)

30歳の時、
第8回文展で
《瓮》を出品し褒状を受賞。
この作品に銅木清方も
惹かれたと書いている。



花鳥が織りなす
絢爛豪華な世界は
光瑠の代名詞にもなった。



昭和に入り、
上品で重厚な大作
《寂光》が生まれる。
光瑠は
夢の様な美しい世界を
追求めたのだった。



栖鳳門で出会った
土田麦僊とは苦学生として
境遇を分かち合い、
二人でお金を借し合って
写生用の鳥を借りたことも
あったようだ。



麦僊らは
絵専へ入学したが、
家庭の事情から
光瑠は進学せず
山の世界へ入っていく。



1909年には
民間パーティイとしては
初の剱岳登頂に成功し、
後にはヒマラヤにも
登るなどしている。



ヨーロッパ滞在中には
いがみ合う友人たちの
仲を取り持ったりと、
人情に篤い姿も
書き残されている。



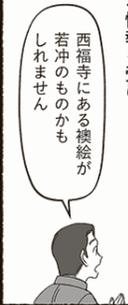
【担当学芸員】



栖鳳は弟子入りした光瑠に、自分の真似をするのではなく、光瑠が学んできた
琳派という特色を伸ばすような指導をしました。さすが栖鳳です！

絵専：京都市立絵画専門学校

光瑠といえば
伊藤若冲とも関係が深い。
ある時学生から
こんな情報を受け：
西福寺にある襖絵が
若冲のものかも
しれません



後日襖絵を見に行き、
感銘を受けた光瑠は
襖絵の模写作品を制作した。



光瑠の若冲研究は
若冲作品の再評価へつながり、
光瑠自身の作品世界を
広げる手がかりにもなった。

報道に関するお問合せ

特別展「生誕140年記念 石崎光瑠」広報事務局(ネネラコ内)

〒531-0072 大阪市北区豊崎3-15-5 TKビル

E-MAIL ishizaki-koyo@nenelaco.com

TEL 06-6225-7885 FAX 06-7635-7587

展覧会名

特別展 「生誕140年記念 石崎光瑠」

※展示作品、会期、展示期間等については、
今後の諸事情により、変更する場合がありますので、
公式サイト等でご確認ください。

会期 2024年9月14日(土)～11月10日(日) ※会期中に
展示替えがあります。

開室時間 10:00～18:00(金曜は10:00～19:30) ※入場は閉室の30分前まで

休館日 月曜日(祝日の場合は開館、翌日休館)

会場 京都文化博物館4・3階展示室

主催 京都府、京都文化博物館、毎日新聞社、京都新聞

お問合せ 京都文化博物館 TEL 075-222-0888 <https://www.bunpaku.or.jp>

「生誕140年記念石崎光瑠」展開連マンガ
2024年
制作：河野沙也子 KAWANO Sayako
X(twitter) : @anaa05 ※無許可の転載、転用を禁じます。 Reproduction is prohibited.

参考文献・石崎光瑠「西福寺の若冲襖絵―新発見の画蹟を覗く―」中央美術
12巻7号、1936年7月／石崎光瑠「土田麦僊君の苦学時代―塚影―」
1937年7月